



高梨庸雄（弘前大学名誉教授）

NC つれづれ草



渡邊時夫（信州大学名誉教授）

国際学力調査が物語るもの

昨年後半の教育ニュースで、賛否両論の話題を提供したものに OECD/PISA2009 がある。ご存知のように、PISA は高校 2 年生が受ける国際学力調査であり、3 年ごとに実施されるので、現在、中学 3 年生の誰かが 2 年以内に受ける可能性があるわけだが、公立の高校入試を間近に控えている中学 3 年生やその指導教員には、遠い世界の話のように思われるかもしれない。しかし、PISA は国際化時代における市民に必須の能力をもとに作成されていることを忘れてはならない。その読解力において、日本は 2003 年に 14 位、2006 年には 15 位まで下がったので、今回の成績の「読解力 8 位に回復」という新聞の見出しが安堵感を表すものだとすれば、「厚い成績下位層 格差拡大」という見出しは別の一面を考えさせるものであろう。中学校レベルにおける英語科でも似た傾向が出ていないか、それを確認するデータがあるか、学校あるいは地区単位で検討する必要がある。

その場合、単なる順位比べで一喜一憂するのではなく、読解力を「情報へのアクセス・取り出し」「統合・解釈」「熟考・評価」の 3 つの側面で分析した場合、日本の生徒は情報を見つけ出すことは得意だが、情報を関連付けたり、解釈したり、知識や経験と結び付けて考えたりすることが相対的に苦手であるという分析結果（国立教育政策研究所）に対して、中学校時代の教育が無罪放免と言えるかどうか、省察の機会が必要になるのではないだろうか。

PISA2009 の読解力問題には、従来の printed text に加えて electronic text も導入されている。これはインターネット上の情報処理にかかわるもので、現代社会では避けて通れない技能になっていることの反映である。広義の Literacy の観点から日本語と外国語の能力を再吟味する必要がある。

韓国の小学校英語教育に学ぶ

10 年振りに、昨年の秋にソウルを訪ね、沢山の小学校の授業を参観させていただいた。小学校 3 年生に初めて英語が導入された 1997 年から 2001 年にかけて何度か英語教育視察に韓国を訪ねたが、今回英語教育事情の進化に触れ、今までになく大きな衝撃を受けた。韓国の英語教育事情の一端に触れてみよう。

- (1) 最近、小学校の英語担当者として採用される者は、TOEIC 900 点以上が目安になっている。
- (2) すべての学校に native speaker を配置。
- (3) 希望するすべての学校に電子黒板を設置。
- (4) 筆者が参観したすべての公立小学校 5、6 年生の授業は活動中心で、英語で進行し、子供たちは活発に参加していた。

教育課程が改訂され、英語については授業時数が増えた。3、4 年生は、2010 年度から週 2 時間になり、5、6 年生は来年度から週 3 時間実施される。

改訂の主たる理由は次の 2 つと言われている。① 英語学習の成功要因は、学習にかかる時間、使用頻度、集中度に比例、② 中学校英語科との連携に必要な授業時数の確保。

改訂に当たっては、① 子供たちの学習負担を増やさない、② そのためにカリキュラムは small steps で進む、の 2 点が強調されている。

韓国では英語を実践的に学ぶという原則を守り、「体験教室」を増やし、場面や活動に変化を持たせながら繰り返し学ぶことを勧めている。政府と国民が、「グローバル世界における国の繁栄は、国民一人ひとりの英語の学力に負うところが大きい」という強い意識を共有している。

「小学校で身につけるべき素地」の意味を小中教員が正しく共有することが大切である。NC の素地の捉え方と具現の仕方は優れていると思っている。